

# 母い守れど

私は長く日本の古代和歌を読んで来ましたが、そこには面白い事実がたくさんあります。古代の若者のことでいえば、ある時期が来ると、古代の農民の娘たちは母親と敵対関係に入ることが非常に多い。

『万葉集』に「筑波嶺<sup>つくばね</sup>のをてもこのものに守部<sup>もりべ</sup>する母い守れど魂<sup>たま</sup>ぞ合ひにける」という東国農民の娘の歌があります。神の山、筑波山のあちこちに番人を置くように、しっかりと母さんは私を見張っているけれど、あの人と私の魂は一つになった、という歌です。母の眼を盗んで恋を成就した喜びを歌っています。ヤッター！というわけです。この歌にうかがわれるように、古代では娘が自由に恋愛することを母親が徹底的に妨害したのです。

妨害には村の伝統や慣習に基づく理由はあるのですが、とにかく娘たちは妨害を乗り越えて恋を貫こうとしました。それは、おとなになるための通過儀礼のようにも思えます。恋ばかりではなく、古代社会では多くのきびしい通過儀礼が若い男女に課され、それを乗り越えた者がおとなの仲間入りを許されたのです。



学長 島田 修三